



▲衛生面に注意され最後のパック詰め

町内の会社 紹介します

株式会社 ひかり食品
所在地 橋 場
代表取締役 伊藤 哲氏

給食用米飯・すし類 パック餅を主に製造

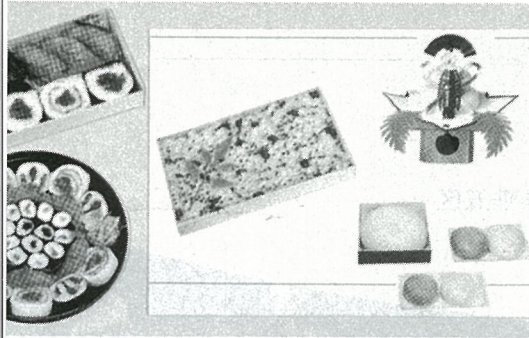
株式会社ひかり食品は、主に学校給食用のご飯と、巻きすし、いなりすし、赤飯、パック餅などを製造している会社です。独自の自動炊飯システムによるご飯はおいしいと好評で、そのため学校給食会からの注文が

多く、現在は東金、海上、四街道、多古町などの小・中学校へ米飯の供給をしています。みなさんが良くご存じのように巻きすし、いなりすし、赤飯なども多く製造しますが、十月に入ると正月用のパック餅の製造に大忙がしです。昨年は暮れまでの間に五十万個を作りました。

(工場長さんのお話)

食品を扱う会社ですから、何といっても衛生面には厳重な注意をしています。また、最近ブームの熱湯やレンジで暖めるだけですぐ食べられる赤飯のパック詰めなども手がけており、このような商品がこれから先増えるのではないかと思われまます。需要に応じた製品の供給を積極的に行っていきたいと思えます。

昭和四十六年十月に設立し、現在に至る。



取扱い商品

町長 ひとりとごごと

岐路にたつ

水田農業

齊藤 讓

田の面を深める稲の青さが、一際目にしみるこの頃である。歌謡曲の文句ではないが、胸にしむこの頃でもある。稲は、日本人の主食として太古の昔から栽培され、激動の長い日本の歴史を裏から支えてきたのである。稲の青さには、今も昔もいささかの変哲もないが、いま、この稲をめぐる事情は一変し、かつて経験したことがない厳しい選択の岐路にたたさされている。少なくとも、三十年前にはじまる高度経済成長時代を迎えるまでの歴史の中で生きた庶民は、常に飢えと戦い、腹いっぱい飯を食べることに生命をかけていた。といっても過言ではあるまい。それが、いま飽食の時代をむかえ、食物は氾濫し、人々の食嗜好は多様化するばかりである。この結果、米ばなれが急速に進行して、かつては国民一人当たり

百二十キログラム消費していたものが、今では七十五キログラムに激減し、将来は更に落ちこむことが予想され米は食生活の主役の座をあけわたす状況にたちいたっている。

一方では、稲作技術の進歩によつて多収獲が定着し、米は完全に過剰時代に入っている。又、アメリカとの貿易不均衡問題の中で、アメリカ農業の行き詰まりから、国内産米より安いカルフォルニア米の輸入圧力が日増しに強くなってきており、いま正に日本の米作は八方ふさがりの状態にある。いま仮に、米の輸入が行なわれたならば、日本農業は壊滅的打撃を受け、大混乱に陥ることは必定であり、何としてもこれは阻止しなければならぬ。政府も、主要食料の安全確保と日本農業を守る立場から懸命の防戦をしているところである。このために国内では、昭和四十五年から米の減反政策が断行され、今年からは水田農

業確立対策として、全国で七十七万ヘクタール、わが光町では全水田面積の二十二パーセントに相当する二五二ヘクタールが米以外の作目に転換せざるを得ない事態となっている。しかし、当町の水田は大半が湿田であり他の作物への転換は容易ではなく、農家の方々の苦しみを思うとたまらなく切ない。当町の農業の基幹作物は水稲であり、農業所得の中心であることから、この状態を考えて町長は減反政策を国へ返上すべきだと主張する者もいる。しかし、私にはそれはできないし又考えてもいない。なぜならば、この厳しさに耐えることこそが、食糧制度を守り、輸入阻止を叫ぶ唯一の道だと確信するからである。

苦境にたっているのは、ひとり農業だけではなく、円高不況にあえぐ企業も同様であり、とりわけ特定業種の中小企業は、生存をかけた厳しい戦いの渦中にあるのである。資本主義経済は、ある面では非道であり、被害者意識に浸っているは何の打開策や解決策も生まれてはこない。今こそ、農業者自らがこの青々と繁る稲をどう守り、安定した水田農業の道をつくるか真剣に考えなければならぬときである。